

生産性向上、人材の確保・育成を柱に

開発虎ノ門コンサルタントが3月1日に創立60周年を迎える。当初の水資源開発から道路整備へと事業の軸足を移しながら、建設コンサルタントとして「社会貢献」の実現に一貫して取り組み、実績と歴史を積み重ねてきた。「会社は人材と技術力が財産」と語る白鳥愛介社長は、社会ニーズが多様化する中で、頻発・激甚化する自然災害や社会インフラ老朽化への対応を取り組みの柱に据える。「100年企業」に向けた今後の戦略を聞いた。

そんじょうが聞きたい

同社は、1953年に創業した社団法人日本開発技術協会を前身に、技術士法の改定や指名競争入札の常態化によるコンサルタント業務の増加を受けて、63年「開発コンサルタント株式会社」として創立。2007年に虎ノ門コンサルタントの事業譲渡を受けて現在の社名に変更した。

「高度経済成長期以降は右肩上がりで業績を伸ばしてきたものの、社会情勢や受注環境の変化などから売り上げが急速に落ち込んだ時期もあった」と、この間の歩みを振り返りつつ、

「役員一丸となつて真摯（しんし）に業務に向き合う姿勢とその成果がお客様からの信頼をいただき、15年度から業績も右肩上がりになり、21年度は過去最高の売上高と利益を更新した。22



開発虎ノ門コンサルタント社長

しらとり よしゆき
白鳥 愛介氏

年度も前年度と同等以上の売上高を予想している」と胸を張る。

「道路構造物や交通系の調査設計、各種施工管理とアセットマネジメントシステム」といった同社の強みが発揮できる防災・減災、国土強靱化やインフラ老朽化対策に予算が重点配分されている中で、「生産性の向上」と「人材の確保と育成」を今後の成長戦略に位置付ける。

生産性向上では「DX（デジタルトランスフォーメーション）化に会社を挙げて取り組み」との考えを示す。昨年

7月には「管理統括部」を新設し、既存の営業統括部、技術統括部と合わせて三つの統括部とした。管理統括部の下には管理部を設け、システム課、DX推進室、業務支援室を配置。「まさにDXを中心に営業、技術両面をバックアップしていく。各部門の連携とシナジー効果を発揮することを期待している」と狙いを語る。

「DX化は働き方改革の観点からも必須だ」とも。「同じ仕事を少ない時間で完成させることで利益と時間を生み出し、利益は報酬へ、時間はワークライフバランスの充実へと労使双方がメリットを享受できる」と力を込める。

人材の確保・育成では新卒とともに中途採用を強化。特に新卒者は長い歴史の中で、大学との関わり合いを大切にしてきたことが功を奏し、安定的に採用できている。これからも「技術力、人材力、組織の強化に力を入れていく」と話す。「健康経営」にも積

極的に取り組み、「社員満足度ナンバーワンの会社」を目指す。「社員それぞれが健康でやりがいい、働きがいを持って心のこもった成果を生み出すことが必然的に経営理念である『顧客満足度の向上』につながる」とも。

災害多発国にあって社会インフラ老朽化が急速に進展する中で、「発災時の復旧対応をいかに迅速に、効率よくできるか。インフラDXも設計と施工だけではなく、維持管理までを見据えた取り組みが大事になる」と指摘。そのためにもAI（人工知能）やドローンの活用とともに、経験豊富なベテラン技術者から若い社員へのスムーズな技術の伝承、柔軟な発想と時代のニーズに則した新技術開発も重視する。将来に向けた新たな事業領域の確立も念頭に、「100年企業」を目指して「より一層の経験と実績を積み、建設コンサルタントとして社会に貢献していきたい」と強調する。

